

※2018年1月改訂(第3版)  
 ※2016年7月改訂

消化管運動改善剤  
**ドンペリドン錠5mg「YD」**  
**ドンペリドン錠10mg「YD」**  
**DOMPERIDONE TABLETS**  
 (ドンペリドン錠)

日本標準商品分類番号
872399

貯法：室温保存、気密容器  
 使用期限：外箱に表示の使用期限内に  
 使用すること。

	錠5mg	錠10mg
承認番号	22500AMX01230	22500AMX01231
薬価収載	2013年12月	2013年12月
販売開始	2013年12月	2013年12月

**[禁忌]** (次の患者には投与しないこと)

- (1) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- (2) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人(「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照)
- (3) 消化管出血、機械的イレウス、消化管穿孔の患者  
 [症状が悪化するおそれがある。]
- (4) プロラクチン分泌性の下垂体腫瘍(プロラクチノーマ)の患者  
 [抗ドパミン作用によりプロラクチン分泌を促す。]

**[組成・性状]**

1. 組成

ドンペリドン錠5mg「YD」

1錠中、ドンペリドン5mgを含有する。  
 添加物として、乳糖水和物、トウモロコシデンプン、セルロース、二酸化ケイ素、ポビドン、ヒドロキシプロピルセルロース、ステアリン酸Mg、ヒプロメロース、マクロゴール、酸化チタン、カルナウバロウを含有する。

ドンペリドン錠10mg「YD」

1錠中、ドンペリドン10mgを含有する。  
 添加物として、乳糖水和物、トウモロコシデンプン、ヒドロキシプロピルセルロース、カルメロースCa、ステアリン酸Mg、酸化チタン、タルクを含有する。

2. 性状

ドンペリドン錠5mg「YD」

白色～微黄白色のフィルムコーティング錠である。

ドンペリドン錠10mg「YD」

白色の片面割線入りフィルムコーティング錠である。

	外形			直径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (mg)	識別コード (PTP)
	表	裏	側面				
ドンペリドン錠5mg「YD」				約6.1	約2.9	79	YD 845
ドンペリドン錠10mg「YD」				約7.1	約2.8	120	YD 465

**[効能・効果]**

下記疾患および薬剤投与時の消化器症状(悪心、嘔吐、食欲不振、腹部膨満、上腹部不快感、腹痛、胸やけ、あい気)

- 成人：○慢性胃炎、胃下垂症、胃切除後症候群  
 ○抗悪性腫瘍剤またはレボドパ製剤投与時
- 小児：○周期性嘔吐症、上気道感染症  
 ○抗悪性腫瘍剤投与時

**[用法・用量]**

成人：通常、ドンペリドンとして1回10mgを1日3回食前に経口投与する。ただし、レボドパ製剤投与時にはドンペリドンとして1回5～10mgを1日3回食前に経口投与する。

なお、年齢、症状により適宜増減する。

小児：通常、ドンペリドンとして1日1.0～2.0mg/kgを1日3回食前に分けて経口投与する。なお、年齢、体重、症状により適宜増減する。ただし、1日投与量はドンペリドンとして30mgを越えないこと。

また、6才以上の場合はドンペリドンとして1日最高用量は1.0mg/kgを限度とすること。

**[使用上の注意]**

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1) 小児(「小児等への投与」の項参照)
- (2) 肝障害又は腎障害のある患者  
 [副作用が強くあらわれるおそれがある。]

※(3) 心疾患のある患者

[QT延長があらわれるおそれがある。]

2. 重要な基本的注意

- (1) 本剤の投与により、間脳の内分泌機能調節異常、錐体外路症状等の副作用があらわれることがあるので、本剤の投与に際しては、有効性と安全性を十分考慮のうえ使用すること。
- (2) 眠気、めまい・ふらつきがあらわれることがあるので、本剤投与中の患者には自動車の運転等危険を伴う機械操作に注意させること。

3. 相互作用

※本剤は主にCYP3A4で代謝される。

併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
フェノチアジン系精神神経用剤 プロクロルペラジン クロルプロマジン チエチルペラジン 等 ブチロフェノン系製剤 ハロペリドール等 ラウオルフィアルカロイド製剤 レセルピン等	内分泌機能調節異常又は錐体外路症状が発現しやすくなる。	フェノチアジン系精神神経用剤、ブチロフェノン系製剤は中枢性の抗ドパミン作用を有し、ラウオルフィアルカロイド製剤は中枢でカテコールアミンを枯渇させる。一方、本剤は血液-脳関門を通過しにくい強い抗ドパミン作用を有する。
ジギタリス製剤 ジゴキシン等	ジギタリス製剤飽和時の指標となる悪心、嘔吐、食欲不振症状を不顕化することがある。ジギタリス製剤の血中濃度のモニターを行う。	本剤は制吐作用を有する。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
抗コリン剤 ブチルスコポラミ ン臭化物 チキジウム臭化物 チメピジウム臭化 物水和物等	本剤の胃排出作用が 減弱することがあ る。症状により一方 を減量、中止する。又 は必要に応じて間隔 をあけて投与する。	抗コリン剤の消化管 運動抑制作用が本剤 の消化管運動亢進作 用と拮抗する。
制酸剤 H <sub>2</sub> 受容体拮抗剤 シメチジン ラニチジン等 プロトンポンプ阻害 剤 オメプラゾール等	本剤の効果が減弱す るおそれがあるの で、両剤の投与時間 を考慮する。	胃内pHの上昇によ り、本剤の消化管吸 収が阻害される。
※ CYP3A4阻害剤 イトラコナゾール エリスロマイシン等	本剤の血中濃度が上 昇する。 また、エリスロマイ シンとの併用におい ては、QT延長が報告 されている。	左記薬剤の強力又は 中程度のCYP3A4阻 害作用により本剤の 代謝が阻害される。

#### 4. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

##### (1) 重大な副作用

※1) ショック、アナフィラキシー(いずれも頻度不明)  
ショック、アナフィラキシー(発疹、発赤、呼吸困難、顔面浮腫、口唇浮腫等)を起こすことがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

##### 2) 錐体外路症状(頻度不明)

後屈頸、眼球側方発作、上肢の伸展、振戦、筋硬直等の錐体外路症状があらわれることがあるので、このような症状があらわれた場合には、投与を中止すること。なお、これらの症状が強い場合には、抗パーキンソン剤を投与するなど適切な処置を行うこと。

##### 3) 意識障害、痙攣(いずれも頻度不明)

意識障害、痙攣があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。

##### 4) 肝機能障害、黄疸(いずれも頻度不明)

AST(GOT)、ALT(GPT)、 $\gamma$ -GTPの上昇等を伴う肝機能障害、黄疸があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には、投与を中止し、適切な処置を行うこと。

##### (2) その他の副作用

下記のような副作用があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量・休薬等の適切な処置を行うこと。

なお、太字で記載の副作用については投与を中止すること。

	頻度不明
肝臓	肝機能異常[AST(GOT)、ALT(GPT)、 $\gamma$ -GTP、ビリルビン、Al-P、LDH上昇等]
内分泌	<b>女性化乳房</b> 、プロラクチン上昇、乳汁分泌、乳房膨満感、月経異常
消化器	下痢、便秘、腹痛、腹部圧迫感、口渇、胸やけ、悪心、嘔吐、腹部膨満感、腹部不快感、腹鳴、腸痙攣
※ 循環器	心悸亢進、QT延長
皮膚	蕁麻疹、発疹、そう痒
その他	口内のあれ、発汗、眠気、動揺感、めまい・ふらつき

#### 5. 高齢者への投与

一般的に高齢者では生理機能が低下しているので減量するなど注意すること。

#### 6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

(1) 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないこと。

[動物実験(ラット)で骨格、内臓異常等の催奇形作用が報告されている。]

(2) 授乳中の婦人には大量投与を避けること。

[動物実験(ラット)で乳汁中へ移行することが報告されている。]

#### 7. 小児等への投与

小児において錐体外路症状、意識障害、痙攣が発現することがあるため、特に1才以下の乳児には用量に注意し、3才以下の乳幼児には7日以上での連用を避けること。

また、脱水状態、発熱時等では特に投与後の患者の状態に注意すること。

#### 8. 過量投与

錐体外路症状、めまい、見当識障害が起こるおそれがある(特に小児では起きやすい)。過量服用時には活性炭投与等適切な処置を行い、一般的な支持・対症療法を実施する。

錐体外路症状に対しては抗パーキンソン剤を投与するなど適切な処置を行う。

#### 9. 適用上の注意

##### 薬剤交付時

P T P包装の薬剤はP T Pシートから取り出して服用するよう指導すること。(P T Pシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている)

#### 10. その他の注意

外国において本剤による重篤な心室性不整脈及び突然死が報告されている。特に高用量を投与している患者又は高齢の患者で、これらのリスクが増加したとの報告がある。

#### [薬物動態]

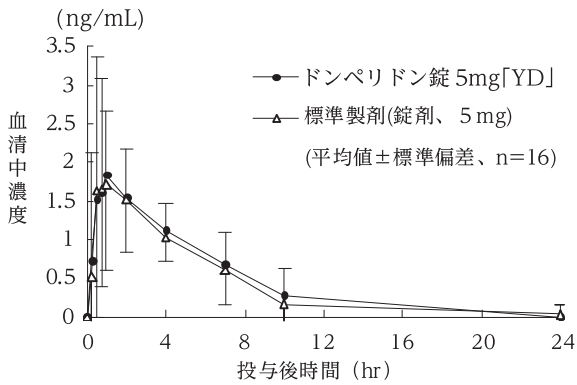
##### ドンペリドン錠5mg[YD]

##### (1) 生物学的同等性試験

ドンペリドン錠5mg[YD]と標準製剤をクロスオーバー法によりそれぞれ1錠(ドンペリドンとして5mg)、健康成人男子16名に絶食単回経口投与して血清中未変化体濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ(AUC、Cmax)について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された。<sup>1)</sup>

	判定パラメータ		参考パラメータ		
	AUC <sub>0-24</sub> (ng·hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	t <sub>1/2</sub> (hr)	
				$\alpha$ 相	$\beta$ 相
ドンペリドン錠5mg[YD]	11.7±5.5	2.4±1.1	1.6±1.7	1.4±0.6	6.1±4.3
標準製剤(錠剤、5mg)	10.4±6.4	2.5±1.5	1.2±1.0	1.4±0.7	8.0±4.9

(平均値±標準偏差、n=16)



血清中濃度並びにAUC、Cmax等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

## (2) 溶出挙動

ドンペリドン錠5mg[YD]は、日本薬局方外医薬品規格第3部に定められたドンペリドン錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

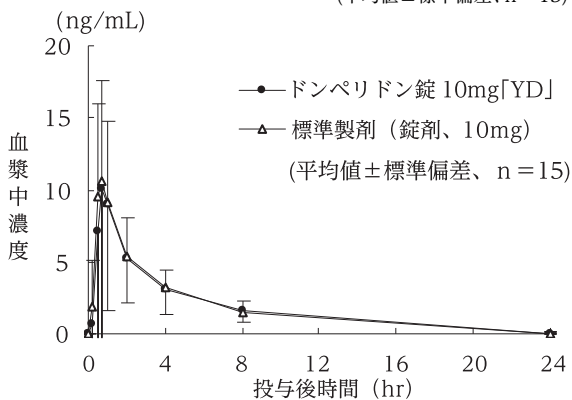
## ドンペリドン錠10mg[YD]

### (1) 生物学的同等性試験

ドンペリドン錠10mg[YD]と標準製剤をクロスオーバー法によりそれぞれ1錠(ドンペリドンとして10mg)、健康成人男子15名に絶食単回経口投与して血漿中未変化体濃度を測定した。得られた薬物動態パラメータ(AUC、Cmax)について統計解析を行った結果、両剤の生物学的同等性が確認された。<sup>2)</sup>

	判定パラメータ		参考パラメータ	
	AUC <sub>0-24</sub> (ng·hr/mL)	Cmax (ng/mL)	Tmax (hr)	t <sub>1/2</sub> (hr)
ドンペリドン錠10mg[YD]	43.3±26.2	11.8±11.2	1.1±0.9	3.7±1.5
標準製剤(錠剤、10mg)	43.0±19.1	12.8±7.0	0.7±0.2	2.8±0.6

(平均値±標準偏差、n=15)



血漿中濃度並びにAUC、Cmax等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

## (2) 溶出挙動

ドンペリドン錠10mg[YD]は、日本薬局方外医薬品規格第3部に定められたドンペリドン錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

## [有効成分に関する理化学的知見]

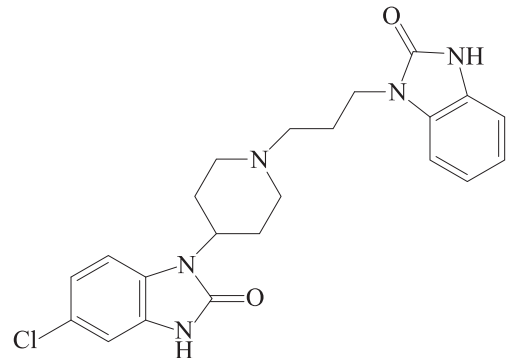
一般名：ドンペリドン(Domperidone)

化学名：5-Chloro-1-[1-[3-(2-oxo-2,3-dihydro-1H-benzimidazol-1-yl)propyl]piperidin-4-yl]-1,3-dihydro-2H-benzimidazol-2-one

分子式：C<sub>22</sub>H<sub>24</sub>ClN<sub>5</sub>O<sub>2</sub>

分子量：425.91

構造式：



性状：白色～微黄色の結晶性の粉末又は粉末である。

酢酸(100)に溶けやすく、メタノール又はエタノール(99.5)に溶けにくく、2-プロパノールに極めて溶けにくく、水にほとんど溶けない。

融点：約243℃(分解)

## [取扱い上の注意]

ドンペリドン錠5mg[YD]

### 安定性試験

最終包装製品を用いた加速試験(40℃、相対湿度75%、6ヶ月)の結果、ドンペリドン錠5mg[YD]は通常の市場流通下において3年間安定であることが推測された。<sup>3)</sup>

ドンペリドン錠10mg[YD]

### 安定性試験

最終包装製品を用いた長期保存試験の結果、外観及び含量等は規格の範囲内であり、ドンペリドン錠10mg[YD]は通常の市場流通下において3年間安定であることが確認された。<sup>4)</sup>

## [包装]

ドンペリドン錠5mg[YD]

PTP：100錠

ドンペリドン錠10mg[YD]

PTP：100錠、1000錠

バラ：1000錠

## [主要文献]

- 1) (株)陽進堂社内資料：生物学的同等性試験
- 2) (株)陽進堂社内資料：生物学的同等性試験
- 3) (株)陽進堂社内資料：安定性試験
- 4) (株)陽進堂社内資料：安定性試験

## ※※[文献請求先]

主要文献に記載の社内資料につきましても下記にご請求下さい。

株式会社 陽進堂 お客様相談室  
富山県富山市婦中町萩島3697番地8号  
☎ 0120-647-734

製造販売元

 株式会社 陽進堂  
富山県富山市婦中町萩島3697番地8号